

# 人とかかわるよさに気付く生活科学習支援の在り方についての研究

佐賀市立神野小学校 教諭 江島 孝浩

## 要 旨

核家族化，少子化などの社会の変化に伴い，現代の子どもたちは人とのかかわりが希薄化している。本研究は，生活科の特性を明らかにし，人とかかわるよさに気付いていくための教師の支援の在り方を考えるものである。教師の支援を子どもの見取りから年間計画の作成，単元や場の設定を含めたものとして大きくとらえ，人とのかかわりを重視した学習活動を行った。その結果，子どもたちは自力解決をしていく中で，自らの求めで活動することを楽しみ，人とかかわるよさに気付くことができた。

<キーワード> 生活科 教師の支援 人とのかかわり 子どもの見取り

## 1 主題設定の理由

現代社会では，核家族化，少子化の進行など社会構造の変化により，子どもたちは人と接する機会が少なくなった。平成10年12月に改訂された新学習指導要領では，生活科の目標部分に「身近な人々」という文言が追加され，子どもたちがいろいろな人たちとかかわることを重視している。そのかかわり方については，かかわりの双方向性が打ち出され，子どもたちが自分から他者へ，他者から自分への働きかけを自覚することを求めている。

実際に，子どもたちの様子を見てみると自分中心に考えてしまう子ども，どのように他の人と接したらいいのか分からない子どもが多い。その原因として家族とかかわる時間が短いこと，既製のおもちゃの普及により一人でも楽しく遊べるようになったことが考えられる。

このような実態を受け，これまでに1・2年又は園児を巻き込んだ異年齢交流に重点をおいた生活科学習を行ってきた。その中で，子どもたちが人とのかかわりを深めたり広げたりするために，子どもたちと教師の思いをどうつむいでいけばいいのか，子どもが自ら人とかかわるための支援はどうあればいいのかなどの課題が見えてきた。また，子どもたちが人とかかわることによって，今まで気付かなかったかかわるよさや楽しさを体験し，もっとたくさんの人々との交流を望むようになってほしいと考えた。そこで，本主題を設定し，研究を進めていくことにした。

## 2 研究の目標

一人一人の子どもが，人と触れ合うことを喜びとし，人とうまくかかわれるようになるための支援の在り方を明らかにする。

## 3 研究の仮説

様々な人とかかわる単元や場の設定を工夫しながら，子どもたちの思いを見取った支援活動を行えば，子どもたちは人とかかわるよさに気づき，これからもたくさんの人とかかわろうとするであろう。

## 4 研究の内容と方法

- (1) アンケートによる生活科学習に対する実態調査を行う。
- (2) 文献等による調査・研究を行う。
- (3) 単元の開発を行い，授業実践により仮説を検証する。

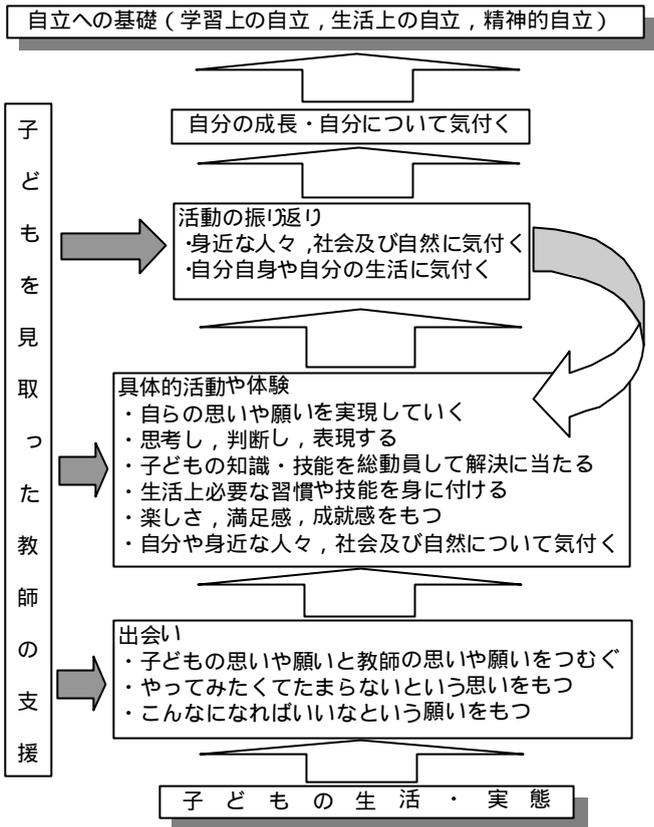
5 研究の実際

(1) 生活科の特性

生活科は子どもたち自身が身近な人々，社会及び自然と直接かかわりながら活動や体験をしていく中で，活動することそのものを楽しみ，自分なりの活動に対するこだわりをもつ教科であると言える。

そのこだわりをもつことが，活動を繰り返して行うことにつながり，子どもたちは自分なりに課題を解決していこうとする。そのような体験を繰り返すことによって，自立への基礎を養う教科なのである。

そのために教師は，子どもたちの思いを大切にしながら，子どもたち自身がいろいろなことに気付き，問題解決に向かうように支援していかなければならない。これらのことをまとめると右図1のように表すことができる。



(2) 教師の支援

ア 子どもの見取り

生活科の支援で重要なことは，子どもたちの思いや願いを正確に見取ることである。

活動前のアンケート調査や日常生活の中で子どもたちの実態を把握し，子どもの思いや願いはどこにあるのかを見取っていくのである。この見取りと，こんな子どもに育ててほしいという教師の願いの2つをつむぎながら，単元設定を行っていかなければならない。

活動中の子どもの見取りは，つぶやき，表情，行動などから行い，一人一人の支援に生かしていく。また，子どもに寄り添って共感的に見取することで，子どもは安心し，意欲的な活動ができるようになる。

活動後は，振り返りメモや表現活動を通して見取りを行い，子どもたちの気づきが深まるようにしたり，これからの活動を方向付けていくことが重要である。

イ 年間計画の作成

生活科は，1・2年で6項目ずつ，合わせて12項目の内容が，今回の学習指導要領の改訂で8項目に厳選された。これは，ゆとりの中で子どもたちが活動をし，様々な気づきをもつことをねらっているのである。だから，その8項目を2年間のスパンでとらえ，ゆとりをもった年間計画を作成しなければならない。ただ，「動植物の飼育・栽培」に関しては，1・2年の両方で取り扱うことが述べられている。

教師は，このことを踏まえた上で子どもの様子を見取り，どんな子どもになってほしいのかを考え

図1 生活科の基本構造

表1 生活科の年間計画

		1年生102時間	2年生105時間						
4	は	がっこうのしいな 15	たのしい春だ 2	や	さ				
		2ねんせいとあそぼう	1ねんせいをむかえよう						
		がっこうなかよしたんけん	わたしたちの町大すき 12						
		がっこうのまわりをあしえてね	町のひみつをさぐる						
		5	い			えんじとなかよし 6	町をたんけんしよう	い	だ
						いってみよういろいろなえんへてがみをかこう	町をしようかいしよう		
		6	っ			こうえんへいこう 10	夏がきた 生き物をそだてよう 10	き	す
						こうえんで生きものをさがそう	こうえんで生き物をさがそう		
		7	ば			こうえんであそぼう	生き物ランドを作ろう	き	す
						なかよしまつりをしよう(1, 2年で)	20		
		8	い			まつりのじゅんぴをしよう	えんじをよんでまつりをしよう	き	す
						あきとなかよし 15	バレーン大会へいこう 7		
9	に	あきをさがそう	のりものにのろう	き	す				
		あきとあそぼう	バレーン大会を楽しもう						
10	な	だいきいっばい 15	やるぞ もちもち大作戦21	き	す				
		いえのだいききはっぴょうかい	つくろう 白い氷						
11	あ	いえのしごとをたのしもう	やるぞ もちつき	き	す				
		むかしのあそびをたのしもう	冬をあそびを楽しもう 5						
12	れ	もうすぐ2ねんせい 15	カルタをつくろう	き	す				
		1ねんかんをふりかえろう	1年生とあそぼう						
1	6	おもいでばっぴょう会をしよう	大きくなったわたしたち18	き	す				
			ちいさいころのわたし						
2	3		えんじのとき	き	す				
			おせわになったひとへ						
3			もうすぐ3年生	き	す				

計画を立てる必要がある。低学年の子どもたちは、活動を通してしかいろいろなことに気付けないという特性があり、行動が衝動的で単発的になりがちである。だから、単元に共通性をもたせたり、子どもの思いを連続・発展させるために配列を考えたりすることが大切である。前ページ表1に作成した年間計画を示している。人とかかわりを考慮した単元をゴシックで、数字は計画時数、～は生活科の内容を示している。

#### ウ 単元や場の設定

単元は、子どもがやらされる活動ではなく、やってみたくてたまらないと思うような活動を保障できるように設定することが大切である。なぜなら、子どもたちは活動することそのものを楽しみ、何度も繰り返し活動する中で様々なことに気付き、考えを深めたり広げたりしていく。だから、多少の困難があってもそれを乗り越えようとして活動を続けるだろう。子どもたちは、活動する喜びに浸りながら、自分自身で問題を解決しようとするのであり、それができるのである。

場の設定については、地域の人材を発掘し、人とかかわることで問題解決に向かうような場を子どもたち自身が作っていくように仕組むことが重要である。教師が季節の変化を子どもたちにとらえさせるために、何度も同じ場所を訪れたり、地域のよさに気付かせるために戸外へ活動の場を広げること大切である。

#### エ 1 単位時間の教師の支援

活動中の教師の働き掛けにより、子ども自身が自分で問題解決をしていくようになる。そういう働き掛けを生活科では大事にしなければならない。子どもたちが気付きを自覚していないときには、学習環境を工夫したり、気付きを意識させる発問や具体物を提示することにより、子どもの動きを作らなければならない。また、試行錯誤している子どもができるようになることを待つことや見守ること、子どもと共に学ぼうとする姿勢を教師がもつことも子どもの意識を高める上で重要である。活動を通して自分たちにかかわっている人に対する言葉遣いや接し方も学ばせていかなければならない。

#### (3) 人とかかわることの重要性

生活科で示されている内容に、人とかかわりを単独で記述している項目はない。しかし、人とかかわりは、子どもたちのこれからの生活を考える上で欠かせないものであり、人と適切にかかわることで、人に対する感謝の気持ち、思いやりの心を育てることができる。

人と触れ合うことは、その人が自分を受け入れてくれる限り楽しいものである。そのことを子どもたちに実感させることが必要だと考える。人とかかわるよさに気付くとは、集団の中で自分の存在に気付くこと、人とかかわる中で自分のよさに気付くことである。また、集団の中で一緒に活動することで感じる連帯感、学び合いのよさに触れ、自ら進んで人とかかわることができる子どもが育つと思う。

#### (4) 人とかかわりを重視した教師の支援の実際

##### ア アンケートによる子どもの実態把握

「生活科が好きか」「分からないときどうするか」「学習中困ったときどうするか」の3項目で事前のアンケートを実施した。生活科が好きと答えた児童は92%でほとんどの子どもが生活科を好んでいる。その理由は、これまでに行った生活科の単元で友達と楽しく活動したり、野菜作りに取り組んで収穫した喜びを味わうことができたからだ。

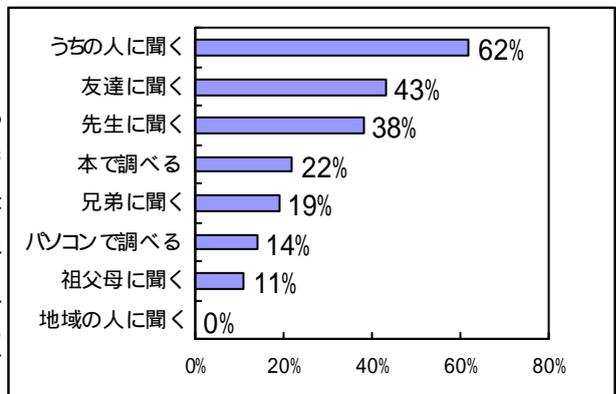


図2 分からないときどうするか

「分からないときどうするか」については、上の図2でも分かる通り、人に尋ねるといふ子どもが多い。この結果は、これまで行ってきた活動の中で家の人に尋ねたり、友達同士で教え合ったりす

る機会が多かったからである。しかし、地域の人や祖父母に対してはかかわろうという意識が低い。なぜなら、これまで設定した単元は、地域の人や祖父母とかかわる必然性がなかったからである。

「学習中困ったときどうするか」では、87%の子どもが自分でがんばると答えていた。これは、町探検の結果を1年生に知らせるために行った活動が影響していると考えられる。その活動は子どもたちにとって大変なことだったが、結果報告のとき、1年生に喜んでもらいがんばってよかったという満足感を味わえたからである。

#### イ 日常の見取りによる子どもの実態把握

本学級の児童は、明るく素直である。学習に意欲をもって取り組む子どもが多い。しかし、自己主張の強い子どもが多く、学年当初は友達同士のトラブルも多かった。その反面、自己主張があまりできない子どもは、人とかかわりを求める様子が見られなかった。そこで、生活科を中心として「人とかかわるよさに気付く子ども」の育成を目指し、友達や1年生、園児とかかわる活動を繰り返し行ってきた。子どもたちは少しずつ人とかかわる楽しさに気付いている。

また、もち米や野菜の成長を心待ちにする姿も見られ、夏野菜の収穫では時間がなかったために、教師がかぼちゃの煮つけを作って食べさせたが、自分たちで調理をしたいという願いをもっているようだ。

#### ウ 人とかかわりを重視した単元や場の設定

これまで述べてきた生活科の特性、教師の支援、人とかかわることの重要性、教材の分析から導き出した以下の(ア)～(オ)により単元を設定した。

- (ア) 人とかかわるよさに気付くことのできる子どもに育てて欲しいという教師の願い
- (イ) 実態調査から分析できる多少困難があっても自分たちで解決しようという子どもたちの学びのスタイル
- (ウ) 自分たちで育てた作物を調理して食べたいという子どもたちの思い
- (エ) 米ができるまでにはたくさんの人の手助けがあったことを子どもたちに知らせる教師の支援
- (オ) もち作りは、問題を解決するために友達や地域の人とかかわりが生まれるという教材の分析

その単元は、子どもたちが田植えと稲刈りをして収穫したもち米を使い、収穫までにいろいろなお世話をしてもらった事務の先生に感謝の持ちを表そうという「やるぞ もちもち大作戦」である。子どもたちは自分たちの力でもちをついてそれを味わってもらうことで感謝の気持ちを表そうと考えた。

表2 人とかかわりを考慮した活動計画

学 習 活 動	教 師 の 支 援	期 待 さ れ る 人 と の か か わ り
1, 課題を作る。	発問などで子どもの思いを見取り、課題を作る。	友達、事務の先生
2, 白い米にする方法を調べる。	子どもたちの調べたことを認め、分かったことを喜ぶ。	家の人、祖父母、地域の人、友達
3, 脱穀、初摺り、精米をする。	グループを作り、活動を認める。	友達、食糧事務所の人
4, もちつきの方法を調べる。	黒樹にまどめ、活動の方向付けをする。	家の人、祖父母、地域の人、友達
5, もちつきの準備をする。	子どもと一緒に準備をする。	保育園の先生、友達
6, 自分たちでもちつきをする。	できるだけ子どもの活動になるように見守る。	友達
7, 振り返る。	満足できたか問い掛ける。	友達
8, 名人さんともちつきをする。	教えてもらう時の態度について考えさせる。	家の人、地域の人、友達
9, 振り返る。	かかわった人たちのことを考えさせる。	事務の先生、友達

この単元の活動計画は上の表2に示した通りである。人とかかわりを重視したいという教師の願いから、各活動の場面でどのような人とかかわりが期待できるかを考えて9つの場面を設定した。

#### (5) 検証授業

実際の授業は、まず課題を作ることから始まった。次のページの図3は、課題作りの場面での教師の発問と子どもをつぶやきや発言である。子どもたちに興味・関心をもたせるために具体物を提示したり、刈り取った稲を教室の後ろに干しておくなどの場の設定をした。また、立派な稲を育てることができたことをほめた上で、米という漢字が八十八回も手が掛かるという意味で作られていることを話した。すると一人の子どもが「ぼくたち田植えと稲刈りの2回しかしとらん」と発言した。



がんばっても粘りがたまらなくて途中で投げ出しそうになったが、自分の立てた課題を解決しようとして最後までくじけることなくがんばった姿がうかがえる。人とのかかわりについては、子どもたちの力だけでは解決できない「もちをつく」という活動が中心となる単元であったため、必然的に人とかかわる活動が必要となった。これまで子どもたちは、困難なことや分からないことがあるとすぐに教師を頼ってきたが、今回の授業では教師は教えすぎない、子ども自身が動き始めるまでじっくりと待つという姿勢で子どもたちに接してきた。だから、友達・父母・祖父母・地域の方など様々な人とのかかわりが生まれた。

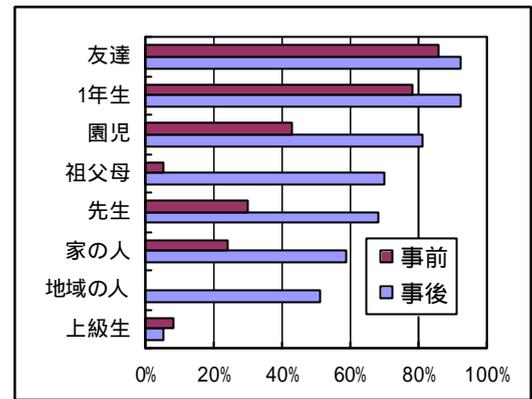


図6 人とのかかわりの広がり

自分たちで解決できなくても周りの人々の力を借りれば解決できること、自分たちで悩んだ分だけ大きくなる感謝の気持ち、感謝の気持ちを表したことで喜んでくれた相手の姿など人と双方向性をもってかかわることの素晴らしさを子どもたちは実感できたと思う。上図6は、授業前と授業後にとった「どんな人とかかわることができているか」というアンケートの結果であるが、上級生に対するかかわり以外は大きく増えている。この単元を実施したことで、子どもたちは今後も積極的に人とかかわっていかうとするであろう。

#### イ 教師の支援

どの場面でのどのような支援を行うかを明確にして、授業時の支援を行った。これまでは、子どもに考えさせなければならぬ場面で、教師が先に解決の方法を教えたり、試行錯誤している姿を見て我慢できずに手伝ったりすることが多かった。しかし、今回の授業は教師が出過ぎることなく、温かく見守るということを大切に、解決できずに困っているときは励ましたり方向付けをしたりすることで子どもたちに自分で解決する喜びと楽しさを感じてほしいと考えた。

その結果、子どもたちは悩んだり苦しんだりした分だけ、達成感が大きくなることを実感し、その経験を基に次の活動へも意欲的に取り組んでいった。

## 6 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

- ・教師と子どもの願いをつむいだ単元作りをしたことで、多少困難なことがあっても、子どもたちはあきらめず、課題解決に向かうことができた。
- ・必然性のある人とかかわる場を設定したことで、子どもたちは人とかかわるよさに気付き、自ら人とかかわろうとすることができた。
- ・表現活動の場や振り返りメモにより、自分たちがこれからどのような活動をしていけばよいか気付き自分たちで活動を作っていくことができた。

### (2) 今後の課題

- ・子どもの特性に応じた見取りの有効性を確かめるため、児童心理学的分野から研究を深める必要がある。
- ・作成した年間計画を2年間通して実践することにより、この計画の有効性を子どもの変容によって検証する。

#### 《参考文献》

- ・ 嶋野道弘・中野重人編著 『新しい学力観に立つ授業展開のポイント』 1994年 東洋館出版
- ・ 寺尾慎一編著 『生活科・総合的学習 重要用語300の基礎知識』 1999年 明治図書